









この書の繪装は悉く藤島武二先生の  
意匠に成れり  
表紙裏みだれ装の輪廓は戀愛の矢の  
ハート射たるにて矢の根より吹き  
出でたる花は詩を意味せるなり



戀 現 代 小 説 愛  
白 日 合  
春 夏 秋 冬

藤 島 武 二 畫



春 舞 は 白 蓮 臈  
た の 脂  
ち 百 花  
思 姫 妻 合 船 紫

鳳  
品  
子  
著



みだれ髪

鳳 品 子 著

臙脂紫

夜の帳ちやうにささめき盡つきし星の今をげ下界かいの  
人の髪かみのほつれよ



歌にきけな誰れ野の花に紅き否いなむおもむ  
きあるかな春罪はるつみもつ子

髪かみ五尺ときなば水にやはらかき少女せうにょごこ  
ろは秘めて放たじ

血ぞもゆるかさむひと夜の夢のやど春を  
行く人神おとしめな

椿それも梅もさなりき白かりきわが罪問  
はぬ色桃いろももに見る

その子二十はたち櫛にながるる黒髪のおごりの  
春のうつくしきかな

堂の鐘のひくきゆふべを前髪まへかみの桃のつぼ  
みに経きんたまへ君



紫にもみうらにはふみだれ篋をかくしわ  
づらふ宵の春の神

臙脂色は誰にかたらむ血のゆらぎ春のお  
もひのさかりの命

紫の濃き虹説きしさかづきに映る春の子  
眉毛かほそき

紺青を絹にわが泣く春の暮やまぶきがさ  
ね友歌ねびぬ

まゐる酒に灯あかき宵を歌たまへ女はら  
から牡丹に名なき

海棠にえうなくときし紅すてて夕雨みや  
る瞳よたゆき



水にねし嗟峨の大堰のひと夜神紹蚊帳の  
裾の歌ひめたまへ

春の國戀の御國のあさぼらけしるきは髪  
か梅花のあぶら

今はゆかむさらばと云ひし夜の神の御裾  
さはりてわが髪ぬれぬ

細きわがうなじにあまる御手のべてささ  
へたまへな歸る夜の神

清水へ祇園をよぎる櫻月夜こよひ逢ふ人  
みなうつくしき

秋の神の御衣より曳く白き虹ものおもふ  
子の額に消えぬ



經きんりゅうはにがし春のゆふべを奥の院の二十五  
菩薩歌うけたまへ

山ごもりかくてあれなのみをしへよ紅べにつ  
くるころ桃の花さかむ

とき髪に室むろむつまじの百合のかをり消え  
をあやぶむ夜よの淡紅たんこう色いろよ

雲ぞ青き來し夏なつ姫ひめが朝の髪うつくしいか  
な水に流るる

夜の神の朝のり歸る羊とらへちさき枕の  
したにかくさむ

みぎはくる牛かひ男歌あれな秋のみづう  
みあまりさびしき



やは肌のあつき血汐にふれも見でさびし  
からずや道を説く君

許したまへあらずばこそ今のわが身う  
すむらさきの酒うつくしき

わすれがたきこのみに趣味しゅみをみとめませ  
説かじ紫その秋の花

人かへさず暮れむの春の宵ごこちこ小琴こに  
もたす亂れ亂れ髪

たまくらに鬢びんのひとすぢきれし音ねを小琴こ  
と聞きし春の夜の夢

春雨にぬれて君こし草の門かどよおもはれ顔  
の海棠の夕



小草いひぬ「醉へる涙の色にさかむそれま  
で斯くて覺めざれな少女」

牧場いでて南にはしる水ながしさせても緑  
の野にふさふ君

春よ老いな藤によりたる夜の舞殿ゐなら  
ぶ子らよ束の間老いな

雨みゆるうき葉しら蓮繪師の君に傘まゐ  
らする三尺の船

御相いとごしたしみやすきなつかしき若  
葉木立の中の盧遮那佛

さて責むな高きにのぼり君みずや紅の涙  
の永劫のあと





春雨にゆふべの宮をまよひ出でし小羊君  
をのろはしの我れ

ゆあみする泉の底の小百合花二十の夏を  
うつくしと見ぬ

みだれごちまごひごちぞ頻なる百合  
ふむ神に乳おほひあへず



くれなるの薔薇のかさねの唇に靈の香の  
なき歌のせますな

旅のやど水に端居の僧の君をいみじと泣  
きぬ夏の夜の月

春の夜の闇の中くるあまき風しばしかの  
子が髪に吹かざれ



水に飢ゑて森をさまよふ小羊のそのまな  
ざしに似たらすや君

誰ぞ夕ゆふひがし生駒なまこまの山の上のまよひの雲  
にこの子うらなへ

悔あやまいますなおさへし袖そでに折れし劔つるぎつひの  
理想りようの花はなに刺さあらじ

額ぬかごしに曉あけの月つきみる加茂川かものがわの浅水あまみづ色いろのみ  
だれ藻染もぞめよ

御袖みそでくくりかへりますかの薄間うすまの欄干らんかん夏  
の加茂川かものがわの神

なほ許せ御國みくに遠くば夜よの御神みかみ紅盃べにざら船ふねに送  
りまゐらせむ



狂ひの子われに焰ほのほの翅はねかるき百三十里あ  
わただしの旅

今ここにかへりみすればわがなさけ聞を  
おそれぬめしひに似たり

うつくしき命を惜しと神のいひぬ願ひの  
それは果してし今

わかき小指ゆび胡粉おこなをこくにまごひあり夕ぐ  
れ寒き木蓮の花

ゆるされし朝よそほひのしばらくを君に  
歌へな山の鶯

ふしませとその間まさがりし春の宵衣い桁かに  
かけし御袖かつぎぬ



みだれ髪を京の島田にかへし朝ふしてゐ  
ませの君ゆりおこす

しのび足に君を追ひゆく薄月夜右のたも  
この文がらおもき

紫に小草が上へ影おちぬ野の春かせに髪  
けづる朝

繪日傘をかなたの岸の草になげわたる小  
川よ春の水ぬるき

しら壁へ歌ひこつ染めむねがひにて笠は  
あらざりき二百里の旅

嗟峨の君を歌に假せなの朝のすさびすね  
し鏡のわが夏姿



ふさひ知らぬ新婦かざすしら萩に今宵の  
神のそと片笑みし

ひと枝の野の梅をらば足りぬべしこれか  
りそめのかりそめの別れ

鶯は君が聲よともごきながら緑のそばり  
そとかけ見る

紫の虹の滴り花におちて成りしかひなの  
夢うたがふな

ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清  
瀧夜の明けやすき

紫の理想の雲はちぎれく仰ぐわが空を  
れはた消えぬ



乳ぶさおさへ神祕しんびのとばりそとけりぬこ  
こなる花の紅くれなゐぞ濃き

神の背せなにひろきながめをねがはずや今か  
たかたの袖ぞむらさき

とや心朝こころあさの小琴こごの四つの緒のひとつを永と  
久はに神きりすてし

ひく袖に片笑かたえみもらす春ぞわかき朝のうし  
ほの戀のたはぶれ

くれの春隣すむ畫師えしうつくしき今朝山吹  
に聲わかかりし

郷人きよびとにとなり邸やしきのしら藤の花はどのみに  
問ひもかねたる



人にそひて櫛ささぐるこもり妻母なる君  
を御墓に泣きぬ

なにとなく君に待たるるこちして出で  
し花野の夕月夜かな

おばしまにおもひはてなき身をもたせ小  
萩をわたる秋の風見る

ゆあみして泉を出でしやははだにふるる  
はつらき人の世のきぬ

賣りし琴にむつびの曲をのせしひびき逢  
魔がごきの黒百合折れぬ

うすものの二尺のたもとすべりおちて螢  
ながるる夜風の青き



戀ならぬねざめたたすむ野のひろさ名なし  
小川のうつくしき夏

このおもひ何とならむのまごひもちしそ  
の昨日きのふすらさびしかりし我れ

おりたちてうつつなき身の牡丹見ぬそぞ  
ろや夜よるを蝶のねにこし

その涙のごふるにしは持たざりきさびし  
の水に見し二十はつか日月つき

水十里ゆふべの船をあだにやりて柳によ  
る子ぬかうつくしき(なごめ)

旅の身の大河おほかほひとつまごはむや徐しゆかに日ひ  
記きの里の名けしぬ(旅びと)





小傘<sup>かさ</sup>とりて朝の水くむ我<sup>わが</sup>ところ穂<sup>ほ</sup>麥<sup>むぎ</sup>あを  
あを小雨<sup>こさめ</sup>ふる里

おとに立ちて小川をのぞく乳母<sup>うぶ</sup>が小窓<sup>こまど</sup>小  
雨<sup>さめ</sup>のなかに山吹<sup>やまぶき</sup>のちる

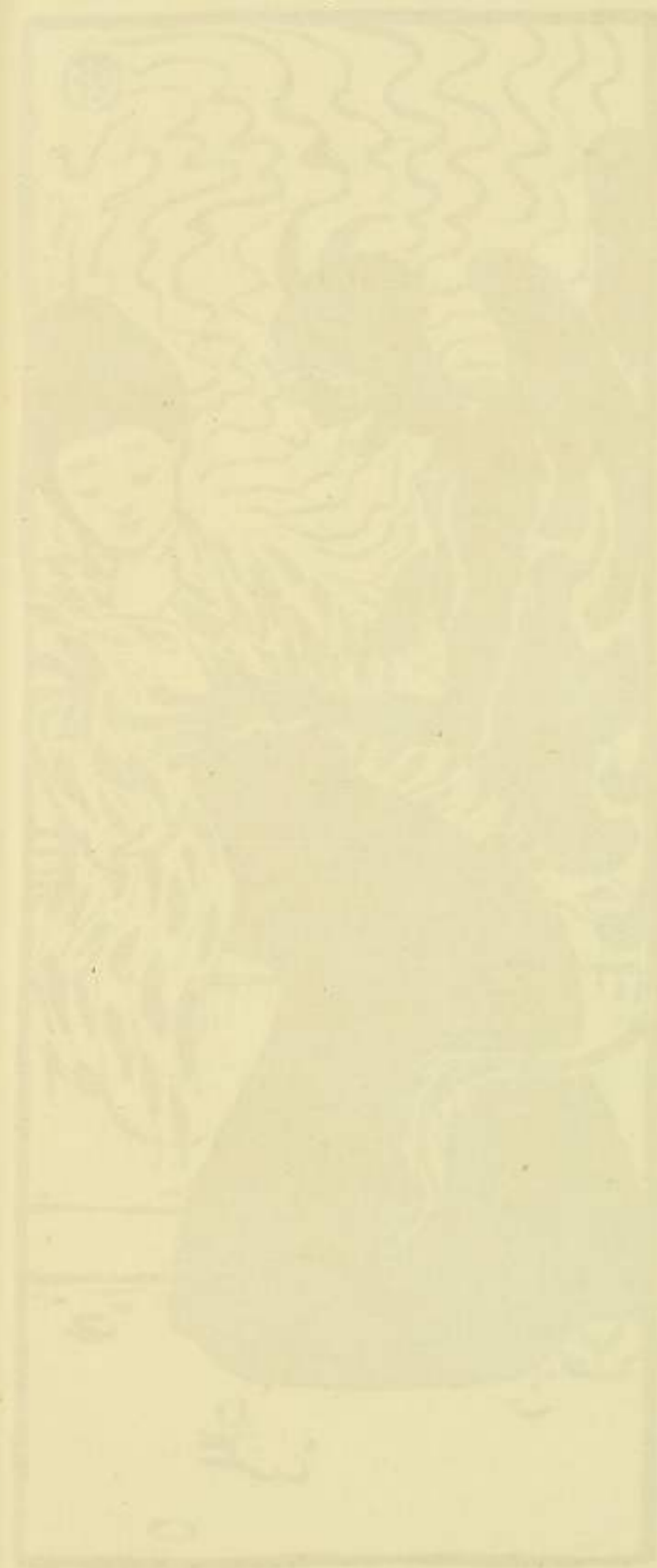
戀<sup>こひ</sup>か血<sup>ち</sup>か牡丹<sup>ぼたん</sup>に盡<sup>つ</sup>きし春<sup>はる</sup>のおもひこのる  
の宵<sup>よ</sup>のひとり歌<sup>うた</sup>なき



長き歌を牡丹にあれの宵の殿妻おとめとなる身  
の我れぬけ出でし

春三月みつき柱ちおかぬ琴に音たてぬふれしそぞ  
ろの宵の亂れ髪

いづこまで君は歸るとゆふべ野にわが袖  
ひきぬ翅はねある童わらわ





ゆふぐれの戸に倚り君がうたふ歌うき里  
去りて往きて歸らじ』

さびしさに百二十里をそぞろ來ぬと云ふ  
人あらばあらば如何ならむ

君が歌に袖かみし子を誰と知る浪速の宿  
は秋寒かりき

その日より魂にわかれし我れむくる美し  
と見ば人にとぶらへ

今の我に歌のありやを問ひますな柱なき  
織絃これ二十五絃

神のさだめ命のひびき終の我世琴に斧う  
つ音ききたまへ



人ふたり無才の二字を歌に笑みぬ戀二萬  
年ながき短き

蓮の花船

漕ぎかへる夕船おそき僧の君紅蓮や多き  
しら蓮や多き

あづまやに水のおとさく藤の夕はづしま  
すなのひくき枕よ



御袖ならず御髪みかみのたけときこえたり七尺  
いづれしら藤の花

夏花のすがたは細きくれなるに眞まこと晝ひるいき  
むの戀よこの子よ

肩おちて經きやうにゆらぎのそぞろ髪をとめ有あ  
心者こころし春の雲こき

とき髪を若わか枝えにからむ風の西よ二尺足ら  
ぬうつくしき虹

うながされて汀みぎはの間に車おりぬほの紫の  
反橋あへの藤ふじ

われとなく梭とこの手とめし門かどの唄うた姉あねがゑま  
ひの底はづかしき



ゆあがりのみじまひなりて姿見に笑みし  
昨日きのふの無なきにしもあらず

人まへを袂すべりしきぬでまり知らずと  
云ひてかかへてにげぬ

ひとつ篋かさにひひなをさめて蓋ふたどちて何と  
なき息桃いきももにはばかり

ほの見しは奈良のはづれの若葉宿わかばやどうすま  
ゆすみのなつかしかりし

紅あかに名の知らぬ花さく野の小道こみちいそぎた  
まふな小傘こがさの一人ひとり

くんだり船昨夜ふね月かげに歌そめし御堂みだうの壁  
も見えず見えすなりぬ



師の君の目を病みませる庵いほの庭へうつし  
まゐらす白菊の花

文字ほそく君が歌ひとつ染めつけぬ玉虫たまむし  
ひめし小篋こけの蓋ふたに

ゆふぐれを籠へ鳥よぶいもうどの爪つめ先さきぬ  
らす海棠の雨

ゆく春をえらびよしある絹裕衣きぬあはせねびのよ  
そめを一人ひとりに問ひぬ

ぬしいはずそれなの筆の水の夕そよ墨足  
らぬ撫子なごしこがさね

母よびてあかつき問ひし君といはれそむ  
くる片頬柳にふれぬ



のろひ歌かきかさねたる反古とりて黒き  
胡蝶をおさへぬるかな

額しろき聖よ見すや夕ぐれを海棠に立つ  
春夢見姿

笛の音に法華經うつす手をとごめひそめ  
し眉よまだうらわかき

白檀のけむりこなたへ絶えずあふるにく  
き扇をうばひぬるかな

母なるが枕經よむかたはらのちひさき足  
をうつくしと見き

わが歌に瞳のいろをうるませしその君去  
りて十日たちにはけり



かたみぞと風なつかしむ小扇のかなめあ  
やふくなりにはけるかな

春の川のりあひ舟のわかき子が昨夜の泊  
の唄ねたましき

泣かで急げやは手にはばき解くるにしる  
にし持つ子の夕を待たむ

燕なく朝をはばきの紐ぞゆるき柳かすむ  
やその家のめぐり

小川われ村のはづれの柳かげに消えぬ姿  
を泣く子朝見し

鶯に朝寒からぬ京の山おち椿ふむ人むつ  
まじき



道たま／＼蓮月が庵のあとに出でぬ梅に  
相行く西の京の山

君が前に李春蓮説くこの子ならずよき墨  
なきを梅にかこつな

あるときはねたしと見たる友の髪に香の  
煙のはひかかるとかな

わが春の二十姿はたちすがたと打ぞ見ぬ底くれなるの  
うす色牡丹

春はただ盃にこそ注ぐべけれ智慧あり顔  
の木蓮や花

さはいへど君が昨日きのふの戀がたりひだり枕  
の切なき夜半よ



人そぞろ宵の羽織の肩うらへかきしは歌  
か芙蓉といふ文字

琴の上に梅の實おつる宿の晝よちかき清  
水に歌すする君

うたたねの君がかたへの旅づつみ戀の詩  
集の古きあたらしき

戸に倚りて菖蒲賣る子がひたひ髪にかか  
る薄靄にほひある朝

五月雨もむかしに遠き山の庵通夜する人  
に卯の花いけぬ

四十八寺そのひと寺の鐘なりぬ今し江の  
北雨雲ひくき



人の子にかせしは罪かわがかひな白きは  
神になごゆづるべき

ふりかへり許したまへの袖だたみ闇くる  
風に春ときめきぬ

夕ふるはなさけの雨よ旅の君ちか道とは  
で宿とりたまへ

巖いはをはなれ谿たにをくだりて躑つ躑じをりて都の  
繪師と水に別れぬ

春の日を戀に誰れ倚るしら壁ぞ憂きは旅  
の子藤たそがるる

油あぶらのあと島田のかたと今日けふ知りし壁かべに李すもも  
の花ちりかかる



うなじ手にひくきささやき藤の朝をよし  
なやこの子行くは旅の君

まごひなくて經ずする我と見たまふか下  
品の佛上品の佛

ながしつる四つの笹舟紅梅を載せしがこ  
とにおくれて往きぬ

奥の室のうらめづらしき初聲に血の氣の  
ぼりし面まだ若き

人の歌をくちすさみつつ夕よる柱つめた  
き秋の雨かな

小百合さく小草がなかに君まてば野末に  
ほひて虹あらはれぬ



かしこしといなみていひて我とこそその  
山坂を御手に倚らざりし

鳥邊野は御親の御墓あるところ清水坂に  
歌はなかりき

御親まつる墓のしら梅中に白く熊笹小笹  
たそがれそめぬ

男をとこきよし載するに僧のうらわかき月にく  
らしの蓮はすの花はな船ぶね

經にわかき僧のみこゑの片かた明あかり月の蓮はす船ぶね  
兄あにこぎかへる

浮葉うきはきるとぬれし袂あひだの紅あかのしづく蓮はすにそ  
そぎてなさけ教へむ



こころみにわかき唇ふれて見れば冷かな  
るよしら蓮の露

明くる夜の河はばひろき嵯峨の欄きぬ水  
色の二人の夏よ

藻の花のしろきを摘むと山みづに文がら  
濡ちぬうすものの袖

牛の子を木かげに立たせ繪にうつす君が  
ゆかたに柿の花ちる

誰が筆に染めし扇ぞ去年までは白きをめ  
でし君にやはあらぬ

おもぎしの似たるにまたもまごひけりた  
はぶれますよ戀の神々



五月雨に築土くづれし鳥羽殿のいぬるの  
池におもだかさきぬ

つばくらの羽にしたたる春雨をうけてな  
でむかわが朝寐髪

しら菊を折りてゑまひし朝すがた垣間み  
しつと人の書きこし

八つ口をむらさき緒もて我れとめじひか  
ばあたへむ三尺の袖

春かせに櫻花ちる層塔のゆふべを鳩の羽  
に歌そめむ

憎からぬねたみもつ子さきし子の垣の  
山吹歌うて過ぎぬ



おばしまのその片袖ぞおもかりし鞍馬を  
西へ流れにし霞

ひとたびは神より更ににほひ高き朝をつ  
つみし練ねりの下した襲がき

白百合

月の夜の蓮はすのおばしま君うつくしうら葉  
の御歌みうたわすれはせずよ

たけの髪をどめ二人ふたりに月うすき今宵しら  
蓮色はすいろまごはずや





荷葉なかば誰にゆるすの上の御句ぞ御袖  
片取るわかき師の君

おもひおもふ今のこころに分ち分かす君  
やしら萩われやしる百合

いづれ君ふるさと遠き人の世ぞと御手は  
なしは昨日の夕



三たりをば世にうらぶれしはらからとわ  
れ先づ云ひぬ西の京の宿

今宵こよひまくら神にゆづらぬやは手なりたが  
はせまさじ白百合の夢

夢にせめてせめてと思ひその神に小百合  
の露の歌ささやきぬ



次のまのあま戸そとくるわれをよびて秋  
の夜いかに長きみちかき  
友のあしのつめたかりきと旅の朝わかき  
わが師に心なくいいひぬ  
ひとまおきてをりをりもれし君がいきそ  
の夜しら梅だくと夢みし

いはず聴かずただうなづきて別れけりそ  
の日は六日二人ふたりと一人ひとり  
もろ羽かはし掩ひしそれも甲斐なかりき  
うつくしの友西の京の秋  
星となりて逢はむそれまで思ひ出でな  
つふすまに聞きし秋の聲



人の世に才秀でたるわが友の名の末かな  
し今日秋くれぬ

星の子のあまりによわし袂あげて魔にも  
鬼にも勝たむと云へな

百合の花わざと魔の手に折らせおきて拾  
ひてだかむ神のころか

しろ百合はそれその人の高きおもひおも  
わは艶ふ紅芙蓉とこそ

さはいへごそのひと時よまばゆかりき夏  
の野しめし白百合の花

友は二十ふたつこしたる我身なりふさは  
すあらし戀と傳へむ



その血潮ふたりは吐かぬちぎりなりき春  
を山蓼やまたぐさたづねますな君

秋を三人みたり椎の實なげし鯉やいづこ池の朝  
かせ手と手つめたき

かの空よ若狭は北よわれ載せて行く雲な  
きか西の京の山

ひと花はみづから溪にもとめきませ若狭  
の雪に堪へむ紅くわな

『筆のあとに山居やまゐるのさまを知りたまへ』人へ  
の人の文さりげなき

京はものつらきところと書きさして見  
おろしませる加茂の河しろき



恨みまつる湯におりしまの一人居を歌な  
かりきの君へだてあり

秋の衾あしたわびし身うらめしきつめた  
きためし春の京に得ぬ

わすれては谿へおりますうしろ影ほそき  
御肩に春の日よわき

京の鐘この日このとき我れあらずこの日  
このとき人と人を泣きぬ

琵琶の海山ごえ行かむいざと云ひし秋よ  
三人よ人そぞろなりし

京の水の深み見おろし秋を人の裂きし小  
指の血のあと寒き



山蓼のそれよりふかきくれなるは梅よは  
ばかれ神にとがおはむ

魔まのまへに理想りきうくだきしよわき子と友の  
ゆふべをゆびさしますな

魔のわざを神のさだめと眼を閉ぢし友の  
片手の花あやぶみぬ

歌をかぞへその子この子にならふな  
のままだ寸すんならぬ白百合の芽よ



はたち妻

露にさめて腫もたぐる野の色よ夢のただ  
ちの紫の虹  
やれ壁にチチアンが名はつらかりき湧く  
酒がめを夕に秘めな

何となきただ一ひらの雲に見ぬみちびき  
さとし聖歌のほひ  
袖にそむきふたたびここに君と見ぬ別れ  
の別れさいへ亂れじ  
淵の水になげし聖書を又もひろひ空仰ぎ  
泣くわれまごひの子



聖書だく子人の御親の墓に伏して彌勒の  
名をば夕に喚びぬ

神ここに力をわびぬとき紅のほひ興が  
るめしひの少女

瘦せにたれかひなもる血ぞ猶わかき罪を  
泣く子と神よ見ますな

おもはずや夢ねがはずや若人よもゆるく  
ちびる君に映らすや

君さらば巫山の春のひと夜妻またの世ま  
では忘れぬたまへ

あまきにがき味うたがひぬ我を見てわか  
きひじりの流しにし涙





歌に名は相問はざりきさいへ一夜るにし  
のほかの一夜とおぼすな

水の香をきぬにおほひぬわかき神草には  
見えぬ風のゆるぎよ

ゆく水のざれ言きかす神の笑まひ御齒あ  
ざやかに花の夜あけぬ



百合にやる天あめの小蝶のみづいろの翅はねにし  
つけの絲をさる神

ひとつ血の胸くれなるの春のいのちひれ  
ふすかをり神もどめよる

わがいだくおもかげ君はそこに見む春の  
ゆふべの黄き雲ぐものちぎれ



むねの清水あふれてつひに濁りけり君も  
罪の子我も罪の子

うらわかき僧よびさます春の窓ふり袖ふ  
れて經くづれきぬ

今日けふを知らず智慧の小石は問はでありき  
星のおきてと別れにし朝

春にがき貝多羅葉はいたらの名をききて堂の夕日  
に友の世泣きぬ

ふた月を歌にただある三本樹はなき加茂川千鳥  
戀はなき子ぞ

わかき子が乳ちちの香まじる春雨に上羽うはを染  
めむ白き鳩われ



夕ぐれを花にかくるる小狐のにこ毛にひ  
びく北嵯峨の鐘

見しはそれ緑の夢のほそき夢ゆるせ旅人  
かたり草なき

胸と胸とおもひことなる松のかせ友の頬  
を吹きぬ我頬を吹きぬ

野茨<sup>はら</sup>をりて髪にもかざし手にもとり永き  
日野邊に君まちわびぬ

春を説くなその朝かせにはころびし袂だ  
く子に君こころなき

春をおなじ急瀬<sup>はひせ</sup>さばしる若鮎の釣緒<sup>つりづな</sup>の細  
うくれなるならぬ



みなぞこにけふる黒髪ぬしや誰れ緋鯉の  
せなに梅の花ちる

秋を人のよりし柱にとがぬあり梅にこと  
かるきぬぎぬの歌

京の山のこぞめしら梅人ふたりおなじ夢  
みし春と知りたまへ

なつかしの湯の香梅が香山の宿の板戸に  
よりて人まちし闇

詞にも歌にもなさじわがおもひその日そ  
のとき胸より胸に

歌にねて昨夜梶の葉の作者見ぬうつくし  
かりき黒髪の色



下京しもぎやうや紅屋べにやが門かどをくぐりたる男かわゆし  
春の夜の月

枝折戸あり紅梅さけり水ゆけり立つ子わ  
れより笑みうつくしき

しら梅は袖に湯の香は下のきぬにかりそ  
めながら君さらばさらば

二十はたとせの我世こゝろの幸さいはうすかりさせめて  
今見る夢やすかれな

二十はたとせのうすきいのちのひびきありと  
浪華の夏の歌に泣きし君

かつぐきぬにその間まの床とこの梅ぞにくき昔  
がたりを夢に寄する君



それ終に夢にはあらぬそら語り中なかのとも  
しびいつ君きえし

君ゆくそその夕ぐれに二人して柱にそめ  
し白萩の歌

なさけあせし文みて病みておとろへてか  
くても人を猶戀ひわたる

夜の神のあともとめよるしら綾の鬢の香  
朝の春雨の宿

その子ここに夕片ゆふかた笑みの二十はたちびと虹のは  
しらを説くに隠れぬ

このあした君があげたるみどり子のやが  
て得む戀うつくしかれな



戀の神にむくいまつりし今日の歌ゑにし  
の神はいつ受けまさむ

かくてなほあくがれますか眞善美わが手  
の花はくれなるよ君

くる髪の手すぢの髪のみだれ髪かつおも  
ひみだれおもひみだるる

そよ理想おもひにうすき身なればか朝の  
露草人ねたかりし

とどめあへぬそぞろ心は人しらむくづれ  
し牡丹さぎぬに紅き

『あらざりき』そは後の人のつぶやきし我に  
は永久のうつくしの夢



行く春の一絃一柱におもひありさいへ火  
かげのわが髪ながき

のらす神あふぎ見するに臉おもきわが世  
の闇の夢の小夜中

そのわかき羊は誰に似たるぞの腫の御色  
野は夕なりし

あえかなる白きうすものまなじりの火か  
げの榮の咀はしき君

紅梅にそぞろゆきたる京の山叔母の尾す  
む寺は訪はざりし

くさぐさの色ある花によそはれし棺のな  
かの友うつくしき





五つとせは夢にあらずよみそなはせ春に  
色なき草ながき里

すげ笠にあるべき歌と強ひゆきぬ若葉よ  
薫れ生駒葛城

据たるる紫ひくき根なし雲牡丹が夢の眞  
晝しづけき



紫のわが世の戀のあさぼらけ諸手のかを  
り追風ながき

このおもひ眞晝の夢と誰か云ふ酒のかを  
りのなつかしき春

みどりなるは學びの宮とさす神にいらへ  
まつらで摘む夕すみれ





そら鳴りの夜ごとのくせぞ狂ほしき汝よ  
小琴よ片袖かさむ(琴に)

ぬしえらばす胸にふれむの行く春の小琴  
とおほせ眉やはき君(琴のいらへて)

去年ゆきし姉の名よびて夕ぐれの戸に立  
つ人をあはれと思ひぬ

十九のわれすでに董を白く見し水はやつ  
れぬはかなかるべき

ひと年をこの子のすがた絹に成らず畫の  
筆すてて詩にかへし君

白きちりぬ紅きくづれぬ床の牡丹五山の  
僧の口おそろしき



今日の身に我をさそひし中の姉小町のは  
てを祈れと去にぬ

秋もろし春みじかしをまごひなく説く子  
ありなば我れ道きかむ

さそひ入れてさらばと我手はらひます御  
衣のにはひ闇やはらかき

病みてこもる山の御堂に春くれぬ今日文  
ながき繪筆とる君

河ぞひの門小雨ふる柳はら二人の一人め  
す馬しろき

歌は斯くよ血ぞゆらぎしと語る友に笑ま  
ひを見せしさびしき思



とおもへばぞ垣をこえたる山ひつじとお  
もへばぞの花よわりなの

庭下駄に水をあやぶむ花あやめ鉄はさまにたら  
ぬ力をわびぬ

柳ぬれし今朝けさ門かどすぐる文づかひ青貝あわすり  
のその箱ほそき

『いまさらにそは春せまき御胸なり』われ眼  
をとちて御手にすがりぬ

その友はもだえのはてに歌を見ぬわれを  
召す神きぬ薄黒き

そのなさけかけますな君罪の子が狂ひの  
はてを見むと云ひたまへ



いさめますか道ときますかさとしますか  
宿世のよそに血を召しませな

もろかりしはかなかりしと春のうた焚く  
にこの子の血ぞあまり若き

夏やせの我やねたみの二十妻里居の夏に  
京を説く君

こもり居に集の歌ぬくねたみ妻五月のや  
どの二人うつくしき



舞 姫

人に侍る大堰の水のおばしまにわかきう  
れひの袂の長き  
くれなるの扇に惜しき涙なりき嗟峨のみ  
ちか夜曉寒かりし

朝を細き雨に小鼓おほひゆくだんだら染  
の袖ながき君  
人にそひて今日京の子の歌をきく祇園清  
水春の山まるき  
くれなるの襟にはさめる舞扇酔のすさび  
のあとさめられな



桃われの前髪ゆへるくみ紐やときいろな  
るがことたらぬかな

浅黄地に扇ながしの都染九尺のしごき袖  
よりも長き

四條橋おしろいあつき舞姫のぬかささや  
かに撲つ夕あられ

さしかざす小傘に紅き揚羽蝶小袂とる手  
に雪ちりかかる

舞姫のかりね姿ようつくしき朝京くだる  
春の川舟

紅梅に金糸のぬひの菊づくし五枚かさね  
し襟なつかしき



舞ぎぬの袂に聲をおほひけりこのみ闇  
の春の廻廊

まこと人を打たれむものかふりあげし袂  
このまま夜をなに舞はむ

三たび四たびおなじしらべの京の四季お  
とどの君をつらしと思ひぬ

あでびとの御膝へおぞやおとしけり行幸  
源氏の巻繪の小櫛

しろがねの舞の花櫛おもくしてかへす袂  
のままならぬかな

四とせまへ鼓うつ手にそそがせし涙のぬ  
しに逢はれむ我か





おほづつみ抱<sup>か</sup>へかねたるその頃よ美<sup>よ</sup>き衣<sup>きぬ</sup>  
きるをうれしと思ひし

われなれぬ千鳥なく夜の川かせに鼓拍子<sup>つみびやうし</sup>  
をとりて行くまで

いもうこの琴には惜しきおぼる夜よ京の  
子こひし鼓のひと手



よそほひし京の子すゑて絹のべて繪の具  
とく夜を春の雨ふる

そのなさけ今日舞姫まひに強しひますか西の秀す  
才さいが眉まゆよやつれし



春 思

いとせめてもゆるがままにもえしめよ斯  
くぞ覺ゆる暮れて行く春  
春みじかし何に不滅の命ぞとちからある  
乳を手にさぐらせぬ

夜の室に繪の具かぎよる懸想の子太古の  
神に春似たらすや  
そのはてにのこるは何と問ふな説くな友  
よ歌あれ終の十字架  
わかき子が胸の小琴の音を知るや旅ねの  
君よたまくらかさむ



松かげにまたも相見る君とわれゑにし  
の神をにくしとおぼすな

きのふをば千とせの前の世とも思ひ御手  
なほ肩に有りとも思ふ

歌は君酔ひのすさびと墨ひかばさても消  
ゆべしきても消ぬべし

神よとはにわかきまごひのあやまちとこ  
の子の悔ゆる歌ききますな

湯あがりを御風<sup>みかぜ</sup>めすなのわが上衣<sup>うわぎ</sup>ゑんじ  
むらさき人うつくしき

さればとておもにうすぎぬかつぎなれず  
春ゆるしませ中<sup>なか</sup>の小屏風



しら綾に鬢の香しみし夜着の襟そむるに  
歌のなきにしもあらず

夕ぐれの霧のまがひもさとしなりき消え  
しともしび神うつくしき

もゆる口になにを含まむぬれといひし人  
のをゆびの血は涸れはてぬ

人の子の戀をもとむる唇に毒ある蜜をわ  
れぬらむ願ひ

ここに三とせ人の名を見ずその詩よます  
過すはよわきよわき心なり

梅の溪の霽くれなるの朝すがた山うつく  
しき我れうつくしき



ぬしや誰れねぶの木かげの釣床つりどの網あみのめ  
もるる水色のきぬ

歌に聲のうつくしかりし旅人の行手の村  
の桃しろかれな

朝の雨につばさしめりし鶯を打たむの袖  
のさだすぎし君

御手づからの水にうがひしそれよ朝かり  
し紅筆べに歌かきてやまむ

春寒はるさむのふた日を京の山ごもり梅にふさは  
ぬわが髪かみの亂れ

歌筆を紅べににかりたる尖凍さきいてぬ西のみやこ  
の春さむき朝



春の宵をちひさく撞きて鐘を下りぬ二十  
七段堂のきざはし

手をひたし水は昔にかはらずとさけぶ子  
の戀われあやぶみぬ

病むわれにその子五つのをここなりつた  
なの笛をあはれと聞く夜

とおもひてぬひし春着の袖うらにうらみ  
の歌は書かさせますな

かくて果つる我世さびしと泣くは誰ぞし  
ろ桔梗さく伽藍のうらに

人さわれおなじ十九のおもかげをうつせ  
し水よ石津川の流れ



卯の衣を小傘かさにそへて袂たもととりて五月雨わ  
ぶる村はづれかな

大御油おほみぶひひなの殿とのにまるらするわが前髪  
に桃の花ちる

夏花に多くの戀をゆるせしを神悔い泣く  
か枯野ふく風

道を云はず後を思はず名を問はずここに  
戀ひ戀ふ君と我と見る

魔に向ふつるぎの束つかをにぎるには細き五  
つの御指みゆびと吸ひぬ

消えむものか歌よむ人の夢こそはそは夢  
ならむさて消えむものか



戀と云はじそのまぼろしのあまき夢詩人  
もありき畫だくみもありき

君さけぶ道のひかりの遠を見ずやおなじ  
紅なる鬨たちのぼる

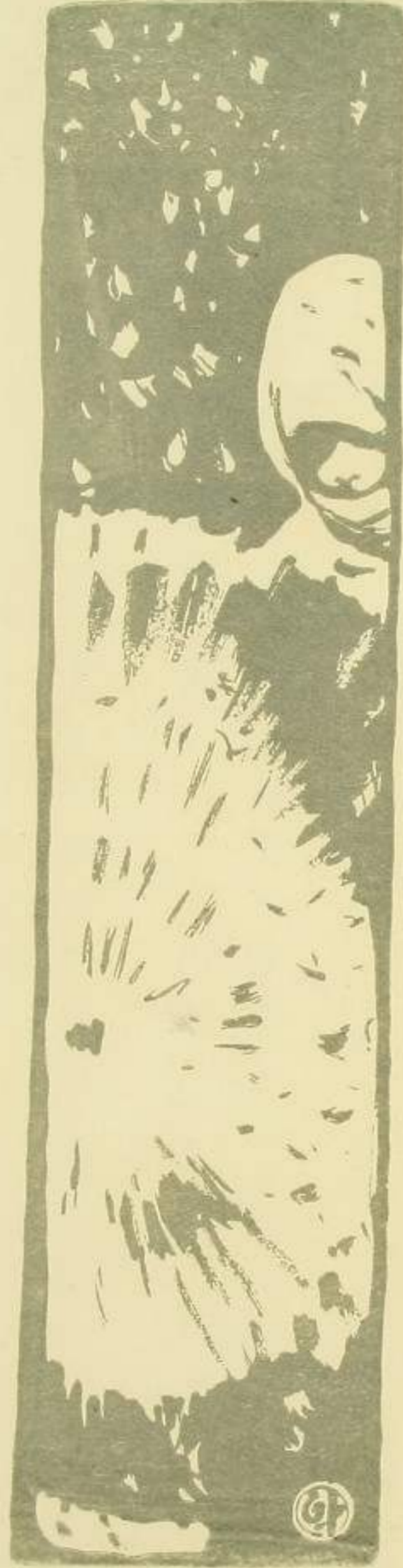
かたちの子春の子血の子ほのほの子いま  
を自在の翅なからずや

ふとそれより花に色なき春となりぬ疑ひ  
の神まごはしの神

うしや我れさむるさだめの夢を永久にさ  
めなど祈る人の子におちぬ

わかき子が髪のしづくの草に凝りて蝶と  
うまれしここ春の國





結願むすねがねのゆふべの雨に花ぞ黒き五尺こちた  
き髪かるうなりぬ

罪おほき男こらせと肌きよく黒髪ながく  
つくられし我れ

そとぬけてその霽はらおちて人を見す夕の鐘  
のかたへさびしき



春の小川うれしの夢に人遠き朝を繪の具  
の紅き流さむ

もろき虹の七いろ戀ふるちさき者よめで  
たからずや魔神まがみの翼つばさ

酔に泣くをどめに見ませ春の神男の舌の  
なにかするどき



その酒の濃きあちはひを歌ふべき身なり  
君なり春のおもひ子

花にそむきダビデの歌を誦せむにはあま  
りに若き我身とぞ思ふ

みかへりのそれはた更につらかりき闇に  
おぼめく山吹垣根

ゆく水に柳に春ぞなつかしき思はれ人に  
外ならぬ我れ

その夜かの夜よわきためいきせまりし夜  
琴にかぞふる三どせは長き

さけな神戀はすみれの紫にゆふべの春の  
讃嘆のこゑ



病みませるうなじにほそ織きかひな捲きて熱  
にかわける御口みくちを吸はむ

天の川そひねの床のさばりごしに星のわ  
かれをすかし見るかな

染めてよと君がみもとへおくりやりし扇  
かへらず風秋あきとなりぬ

たまはりしうす紫の名なし草うすきゆか  
りを歎きつつ死なむ

うき身朝をはなれがたなの細柱ほそはしらたまはる  
梅の歌ことたらぬ

さおぼさすや宵の火かげの長き歌かたみ  
に詞あまり多かりき



その歌を誦すします聲にさめし朝なでよの  
櫛かみの人はづかしき

明日あすを思ひ明日の今おもひ宿の戸に倚る  
子やよわき梅暮れそめぬ

金色こんじきの翅はねあるわらは躑つと躑じくはへ小舟こぶねこぎ  
くるうつくしき川

月こよひいたみの眉はてらさざるに琵琶  
だく人の年とひますな

戀をわれもろしと知りぬ別れかねおさへ  
し袂風の吹きし時

星の世のむくのしらぎぬかばかりに染め  
しは誰のそがおぼすぞ



わかき子のこがれよりしは斧のにはひ美  
妙の御相けふ身にしみぬ

清し高しさはいへさびし白銀のしろきは  
のほと人の集見し（酔茗の君の詩集に）

雁よそよわがさびしきは南なりのこりの  
戀のよしなき朝夕

來し秋の何に似たるのわが命せましちひ  
さし萩よ紫苑よ

柳あをき堤にいつか立つや我れ水はさば  
かり流とからず

幸おはせ羽やはらかき鳩とらへ罪ただし  
たる高き君たち



打ちますにしろがねの鞭うつくしき愚か  
よ泣くか名にうとき羊ひつじ

誰に似むのおもひ問はれし春ひねもすや  
は肌もゆる血のけに泣きぬ

庫裏くらの藤に春ゆく宵のものぐるひ御經みきやうの  
いのちうつつをかしき

春の虹ねりのくけ紐たぐりますす羞はぢるひ神がみの  
暁あけのかをりよ

室むろの神に御肩みかたかけつつひれふしぬるんじ  
なればの宵よの一襲ひとかきね

天あめの才さいここにほひの美しき春をゆふべ  
に集しゆるさすや



消えて凝りて石と成らむの白枯梗秋の野  
生の趣味さて問ふな

歌の手に葡萄をぬすむ子の髪のやはらか  
いかな虹のあさあけ

そと秘めし春のゆふべのちさき夢はぐれ  
させつる十三絃よ



不 許  
複 製

明治卅四年八月十一日印刷  
明治卅四年八月十五日發行

發 賣 所	印 刷 所	印 刷 者	發 行 所	發 行 所	發 行 者	著 者
伊藤文友館	東京市日本橋區大目馬町二丁目二十一番地	東京市京橋區築地二丁目十七番地	東京市京橋區築地三丁目十五番地	東京市京橋區築地三丁目十五番地	伊藤新詩	鳳昌子
	株式會社 東京樂地活版製造所	野村宗十郎	伊藤文友館	東京新詩社	伊藤新詩	

定價金參拾五錢



